

## 二〇一三年度 入学試験問題

経済学部 A方式 I日程・社会学部 A方式 I日程・現代福祉学部 A方式

## 二 限 国 語 (60分)

## 〈注意事項〉

- 一 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
- 二 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 三 マークシート解答方法については下記の注意事項を読みなさい。

## マークシート解答方法についての注意

マークシート解答では、鉛筆でマークしたものを機械が直接読み取って採点する。したがって、解答はHBの黒鉛筆でマークすること(万年筆、ボールペン、シャープペンシルなどは使用しないこと)。

- 一 記入例 解答を3にマークする場合。

(一) 正しいマークの例



(二) 悪いマークの例



枠外にはみださないこと。

○でかこまないこと。

- 二 解答を訂正する場合は、消しゴムでよく消してから、あらためてマークすること。
- 三 解答用紙をよごしたり、折りまげたりしないこと。
- 四 問題に指定された数よりも多くマークしないこと。

〔二〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

私の長らくの疑問は、日本語で考え、日本語で筋の通つた理の構えが備わる言葉を編み出すとしたらどういう条件を勘案すべきなのか、ということであった。

二つのことを記したい。

一つは、日本における表現システムにおける地の言葉と移人の言葉ということである。その点を、とりわけ理にかかわる言葉のこととして考えてみたいのだ。

もう一つは、はじめのことと連動している事実だが、日本における、歌、語りの言葉の性格にかかわることである。

前者のことについてかねがね考えていることがある。理にかかわる言葉の大部分は、明治期にいたるまでは漢語で書かれていることをどのように考察したらよいのか、ということである。考察の筋を逆に立てて、漢語ではない言葉、和語を混じえたかたちで書かれた理の言葉にどのようなものがあるか、と頭をひねってみるとわずかのものに限られる。江戸期になるまでは慈円の『愚管抄』、『正法眼蔵』を中心とする道元の諸著作、北畠親房の『神皇正統記』ほかいくつかに限られるのである。そのいくつかのうちの主たるものは歌論である。ほかに仏教にかかわるケイモウ的著作——たとえば良遍の『法相二巻抄』など——がその種の記述としてある。江戸時代になるといわゆる国学者たちが登場し、この人たちの記述は和文脈でなされることになるが、その時期の思想的主流をなした儒者の記述は、圧倒的に漢文が用いられたのであった。中江藤樹、伊藤仁斎、荻生徂徠、などいずれもそうである。このことは、江戸期になる前の思想的主流であった仏教にかかわる記述、——最澄、空海、源信、親鸞らの記述がやはり漢文で行われたことと合せて注目するに足るのである。というのも、このことは、日本における理にかかわる思考のあり方にかかわるものがあるからである。

こうした場に生ずる理にかかわる思考のあり方について想定すべきは次のような事情だろう。理にかかわる思考を進める主要な武器は概念だが、こうした場では、日常経験に発する概念が思考の主動因とはならない。移入された漢文脈の中で使われ

ている概念が概念の主要部を占めることになる。そのイサイ<sup>①</sup>について記述することは、ここでは省略にしたがう。

今、触れておきたいのは、こうした場の構造自体は、日本という場において現在も変りなくある、ということである。明治以後、理にかかわる思考の記述が漢文でなされることはなくなった。現在は、話し言葉として用いられる日本語と、書き言葉として用いられる日本語との距離は、かなり近接している事態にあるといえよう。しかし、それでも、哲学的考察と呼ばれる思考の営みのうちでは、そこで用いられる概念の背後には、それに相当する欧語が考えられているのが通常の事態である。それゆえ、文化システムの場合としての日本においては、理にかかわる言葉の主軸となる概念を運用する際に、その言葉<sup>②</sup>を言葉にする養いを日常経験の中から掘り出してみようという習慣はきわめて稀薄である、という事態に変わりはないのだ。そのことを私は難じたいわけではない。構造としてそうした事態の中にある日本語使用族のあり方を事柄として照射してみようという役割を自分に課して、この視角から見えてくるものをある程度見通してみたい、というだけである。

そこでこの視角から少し考えを進めようとする、一つの問いに出会う。理にかかわる言葉に関して右に見たありようと、日本における歌、語りの言葉の成り立ちの事情とについてどのような関連項を想定できるのか。この問いは、目下考慮中の二項目の事項にまっすぐにかかわることになる。つまり、話題は、先に挙げた二項のうち、前者から後者に移行するわけである。

理の言葉の運行が概念を軸にしてなされる、ということは疑いないだろう。それならば、歌、語りの場合はどうだろうか。たとえば、本居宣長は『A』の中から「もののおはれ」という概念を引き出し、その概念に人間世界について思考を進める彼の主軸を託した。そうした事例が前例としてある。問題は、このような仕方で考察対象となる概念と外来語を原型とする概念との間に違いはあるのか、あるとすればどのようなものとしてなのか、という点にある。

が、そういった上で提起しておきたいのは、違いがあるか考えるか考えないかは、つまるところ、視点のとり方の問題だ、ということである。概念である限り違いがないとして、概念的思考の、——仮のいい方だが、——中立自由性の場に身を委ねるタイプの思考者は、結構、少なくはないはずである。それはそれでよいのだ。それはそれでよいとして、私として採りたい立場は、違いがあるという視点だ、ということをごここにいつておきたい。

／＼ どのような違いがあるか。言葉の性質の上で違いがあるだろう。移入語を軸にした理の言葉は、当然、書き言葉、文字言語である。それに対するのに、歌、語りの言葉は、話し言葉の言語だ、ということは注目しておいてよいことだろう。漢詩は別項として、歌、語りにかかわる記述で、残されているもののうち漢文で記録されているのは『神道集』くらいのものである。がこの漢文には特殊な性格がある。これは万葉仮名ほど徹底してはいないが、話し言葉をなるだけ残して漢文に表記しようという種類のものであつて、中国本来の漢文からはほど遠いのである。そうしたことを勘案すれば、ここでの表記でも、潜在的に優位しているのは、口に出して語り出すことが期待されている話し言葉の領域なのである。漢文風に書かれながらこのような事例があるということこそが、歌、語りの言葉はコウシヨウの領分<sup>(五)</sup>につながるものである事態を如実に示していよう。日本語のみに備わるといわけではないだろうが、私の知る限りではさしあたって日本語に顕著に見られる性格、——書き言葉と話し言葉が微妙に分離しているという性格が、理の言葉と、歌、語りの言葉との層のずれというあり方を独特なかたちでさし示していることになるように思われる。

どのように独特なのか。

視点のとり方でさまざまな方向への言及ができよう。

ここで採ってみたいのは、歌、物語の過剰という視点である。

そのことをいつたところで私的想念を記したい。

私の見るところ、総じて、<sup>(三)</sup>日本における理の言葉の開拓は貧困な状態にあると思われる。もちろん、理の言葉に関心を示す者は少数者でいいのであつて、問題はかかわる人の量のタカ<sup>(五)</sup>ということではない。その業によつて達成される深みである。理にかかわる行為が、事を割つて、事の底に、<sup>(四)</sup>人間についての、世界についての基層となるものを掘りおこし、事態を活性化させようとする営みなのだとするれば、その営みで要請されていることの一つは見えない深みから何かをあぶり出すことである。そうした営みとしての深さが、総じてという限りでいうのだが、充分ではない。なぜか。私の視点からすると、書き言葉が機能している地平と話し言葉が機能している地平とのかかわりについて考える営みを欠いたところで概念の運行を事とする傾き

が強いからである。その点が、おそらく、二重の意味で理の言葉に深みを与えない条件なのだ。一つは、理の言葉というものは、歌、語りの言葉と充分にかかわりながら、事を事割るためには、歌、語りの言葉を断る、つまり歌、語りの言葉から位相を転換させることによって真に理の言葉として働き出すはずなのだが、移入言語の概念が理の言葉の主流を占めるところでは、この言葉が歌、語りの言葉と正当に真向うことがないという点である。ここでは、この二つの言葉は、表裏一体の緊張としてではなく、異なる位相ですれ違う地平にそれぞれあるのだ。もう一つの条件とは、そうした仕方で歌、語りの領分が野放しにされている事態にあつては、歌、語りの領分がどのような仕方であるのか、も限定されることがない、という点である。その条件の中では、歌、語りは、享受されることがあつても、それが構造としてどのようなものであるのか、が総体として見通されるということがない。結果として、現象としての過剰という事態とは裏腹に、歌、語りのありうる可能性の方向の探究という点については、営みとして貧困であらざるをえない。

と、そういうことで、私的想念では、歌、語りの過剰の中の貧困と理の言葉の見かけ上の貧困とは見合っている、ということになるのだが、この点についての言及は、今は深追いしない方がいだろう。

こうした次第で、ここで語りの言葉を考察しようとする営みは、語りを事割ること、特に文化システムの中のこととしてどのような構造を語りの言葉が備えるかを事割つてみることとして意図されているのだ。つまり、横まわりしながらではあるが理の言葉を紡ぎ出す営みのつもりなのだ。

(野崎守英「歌・かたり・理」より。ただし原文の一部を変更してある。)

問一 傍線部(ア)～(エ)の漢字と同じ漢字を含むものを、つぎの各群の1～5の中から、それぞれ一つずつ選び、その番号を

解答欄にマークせよ。

- (ア) ケイモウ
- 1 意識がモウロウとしている。
  - 2 弘安の役では九州地方にモウゴが襲来した。
  - 3 戦いはシヨウモウ戦の様相を呈してきた。
  - 4 天モウ恢<sup>かいかい</sup>疎にして漏らさず。
  - 5 幻覚とモウソウに悩まされる。
- (イ) イサイ
- 1 メイジイシンによつて江戸時代が終わった。
  - 2 イギを正して目上の人の話を聞く。
  - 3 代理で届けを提出するのにイニンシヨウが必要だった。
  - 4 裁判の結果にイギを申し立てる。
  - 5 記者会見でイカンの意を表明する。
- (ウ) コウシヨウ
- 1 被告人として裁判所にシヨウカンされる。
  - 2 国際試合で全敗し、シヨウゼンたる姿で帰国する。
  - 3 善行をシヨウヨウする。
  - 4 ズイキの涙を流す。
  - 5 父親の法要でお坊さんが般若心経をズキヨウする。

(エ) タカ

- 1 筆者はカブンにしてそうした例を知らない。
- 2 カブンなおもてなしに恐縮する。
- 3 殺人事件のカガイシャとして疑われる。
- 4 イツキカセイに作品を仕上げる。
- 5 衆議院で法案がカケツされる。

問一 つぎの1～6の著作のうち、その内容が傍線部①で言う歌論に相当するものはどれか。当てはまるものを一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 古今和歌集    2 猿蓑    3 古来風体抄    4 徒然草    5 山家集    6 風姿花伝

問二 傍線部②の「言葉を言葉にする養いを日常経験の中から掘り出してみる」とはどのようなことか、その説明として最も適切なものを、つぎの1～5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 概念的な言葉を日常使う言語に翻訳して意味が通るようにすること。
- 2 概念的な言葉を日常の経験と関連付けて咀嚼し、血肉化すること。
- 3 概念的な言葉の裏に隠された本当の意味を掘り出し、新たに再発見すること。
- 4 概念的な言葉の使用を非難することなく、日本の文化システムの場で育んでいくこと。
- 5 言葉が言葉として機能するのに必要な能力を日常経験の中から掘り起こしていくこと。

問四 本文中の空欄 A に入る文芸作品として最も適切なものはどれか。つぎの1～6の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 枕草子            2 方丈記            3 奥の細道            4 古事記            5 古今和歌集            6 源氏物語

問五 傍線部③において、著者が「日本における理の言葉の開拓は貧困な状態にある」と考えた理由について、最も適切なものをつぎの1～5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 日本では外国に比して概念的な言葉を使う人が少ないために、物事の本質をあぶり出す機能を有する概念的な言葉に対して一般に馴染みが薄く、新たな理の言葉の開拓が等閑視されやすいから。
- 2 日本では概念的な言葉が中国や西洋から移入されることが多かったために、なかなか生きた日本語として定着しにくい傾向があるから。
- 3 日本語では書き言葉と話し言葉の機能する地平がすれ違っているために、日常の話し言葉の中から概念的な言葉が生み出され難いから。
- 4 日本では概念的な言葉を中国や西洋から移入してきた歴史的経緯があるために、それを日本の歌、語りの言葉としてうまく使いこなすことができなかつたから。
- 5 日本では歌、語りの言葉を豊かに生み出してきた歴史があり、そうした歌、語りの言葉を断ち切つてまで概念的な言葉をあらたに開拓する意欲に欠けるから。



問六 傍線部④の「人間についての、世界についての基層となるものを掘りおこし、事態を活性化させようとする営み」とはどのようなことか。その説明として最も適切なものをつぎの1～5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 現象として眼に見える出来事のさらに奥底に潜む構造や原理をあぶり出し、物事の見方を深めて豊かにしようとする営み。
- 2 人間と世界の基層にかかわる事柄を理の言葉を使ってあぶりだし、人間と世界にかかわる概念的思考の貧困さを打破しようとする営み。
- 3 理にかかわる行為によつて、事を割り、そこから沸きあがってくる諸体験を整理して物事を活性化させる営み。
- 4 表には見え難い人間や世界にかかわる基層に目を凝らし、新たな事実をあぶり出して物の見方を逆転させようとする営み。
- 5 歌、語りの言葉から位相を転換させて理の言葉をつむぎ出し、それを人間と世界にかかわる理解の基盤にすえようとする営み。

問七 傍線部⑤において、著者が「野放しにされている」という表現を用いた意図は何か。その説明として最も適切なものをつぎの1～5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 日本では、移入言語である理の言葉とは対照的に和語を基本とする歌、語りの言葉が人びとに自由に享受され楽しまれてきたことを表現するため。
- 2 日本語では、歌、語りの言葉と理の言葉が緊張関係としてかかわり合うことなくすれ違うので、歌、語りのあり方の可能性について論議が乏しいままに享受されるばかりであることを強調するため。
- 3 日本語では、理の言葉と歌、語りの言葉が表裏一体の緊張関係にないため、歌、語りの表現形式や限定が崩れやすく無構造になりやすいことを強調するため。
- 4 日本語の歌、語りの言葉は、理の言葉と正面から対峙することがないので、ただ単に享受されるばかりで、理の言葉のような深みをいつまでも持ち得ないことを表現するため。
- 5 日本では、歌、語りの言葉がいたずらに享受されて無限定に広がったために、歌、語りの全体像を見通すことが出来なくなってしまうことを表現するため。

問八 傍線部⑥の「歌、語りの過剰の中の貧困と理の言葉の見かけ上の貧困とは見合っている」とはどういうことか。その説明として最も適切なものをつぎの1～5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 歌、語りの言葉は、人びとから享受されて豊かな広がりをもつ一方で、その代償として移入言語を基本とする理の言葉は日常用語としてなかなか根付かず、この二つの出来事は一見無関係に見えて因果的に関わりあっているということ。
- 2 日本語においては、歌、語りの言葉が現象として過剰であるために、それらがどのような構造を有しているのかの議論はその過剰さに邪魔されてかえって行ない難くなってしまうという逆説的な事態。
- 3 著者の私的な思いの中では、日本の歌や語りの内容の貧困さと日本語の概念的思考の貧困さが表裏の出来事として見合っているということ。
- 4 歌、語りの言葉にはどのような構造が文化システムとして存在するかという著者の探究の営みが、歌、語りの過剰さという名の貧困に幻惑されて著者の意図とは裏腹に貧しい結果しかもたらさなかつたという皮肉。
- 5 歌、語りの言葉は、現実として過剰に享受されながらも、そこには構造や形式にかかわる議論の乏しさが隠されており、その種の貧困さと日本語表現における理の言葉の貧困が符合するということ。

〔三〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

「〇〇力」という言い方があります。たとえば二〇〇六年、経済産業省は「社会に必要な能力、基礎力」として「社会人基礎力」を定義しましたが、そこには「働きかけ力」「課題発見力」「傾聴力」「状況把握力」「ストレスコントロール力」といった言葉が並んでいます。その他にも、「人間力」「コミュニケーション能力」などに始まり、「就業力」や「女子力」といった言葉を耳にすることがあります。これらは、何かをするうえでの「個人の能力」を強調する独特の言い方で、A 「あの人は、どんな人でも自然に話すことができ、コミュニケーション能力がある」などと使われています。

「〇〇力」は、語学力や筆記能力のような従来の「能力」とは違う、ある意味で奇妙な言い方です。

(1) 第一に、従来の「能力」はある一定の基準のもとに数値によって測定することが容易ですが、「〇〇力」にはそうした基準を設定することが困難です。ある人の「コミュニケーション能力」がどの程度かは、筆記試験をやって「何点」というかたちで表すことはできません。従来の「能力」が、「〜できる」という業績達成を示すのに対し、新たに注目されている「〇〇力」は、より「〜である」という属性のところに関わっています。

(2) 第二に、「能力」はそもそも、個人が持つものですが、「〇〇力」は必ずしもそうではありません。「人間として魅力がある」とか「感じのよい女性だ」と見なされるか否かは、場や相手によるところが大きいのであり、ある場では「人間力」や「女子力」があるように見えた人も、別の場ではそれがないと見なされてしまう可能性があります。この場合、「人間力」「女子力」というより、「ある人が魅力を発揮する関係性がある」と言った方が適切でしょう。

(3) このように、他者や場との関係によって変わってくるはずのものを、個人の中に固定的に措置<sup>①</sup>することを「関係性の個人化」と呼んでみましょう。学校や職場という、人と人が出会い関係を築いていく場において、私たちはしばしば、「あの人はコミュニケーション能力がある／ない」などの言い方で周囲の人を評価し、「関係性の個人化」を行っています。

B こうした文脈依存的にしか見出すことのできないものを、「能力」という個人化された言葉で表現することは、

どのくらい適切なのでしょうか。そこに問題はないのでしょうか。

「〇〇力」の問題のひとつは、ほんらい測ることの難しい個人の人間性や内面性に関わるものが、「能力」の仮面をかぶること  
で、容易に測定可能なものに見えてしまうことです。

(4) 語学力や簿記能力のような従来の能力であれば、透明性のある指標によって測定でき、他者や過去の自分との比較が  
可能で、「どうすれば身につくか」が分かります。こういうものを取り上げて「能力」のある／なしを論じることは、それなりに  
意味があると思います。今の自分のレベルがどれくらいかが分かれば、目標を設定してトレーニングを積み、「能力」に磨きを  
かけることができるからです。

(5) 一方、「コミュニケーション能力」のような、測定不能でどうやって身につけるか分からない曖昧な「能力」はどうで  
しょうか。それは「能力」と言われる以上、個人が持つものとされ、優劣やある／なしという価値判断を被ります。が、「コミュ  
ニケーション能力」は英語力のようにTOEICのスコアで測れるものではありません。私はあの人と比べて「能力」が高いの  
か低いのか、どうすれば「能力」を高めることができるのかが、そこでは不透明です。

そうした曖昧なものを「能力」と見なすことによって、実際には個人の裁量ではどうにもできないかもしれないものを、個人  
の問題にしてしまうことになります。ある人の仕事の能率が上がらないのは、不況による人員削減で大量の仕事が一極集中し  
疲労がたまっているからかもしれませんし、マッチングが悪く不得手な仕事を任されたためかもしれません。育児や介護など  
の家庭の事情で、仕事に全力投球できない場合もあるでしょう。にもかかわらず、「〇〇力がないばかりに能率を上げること  
ができない個人の責任」ということになってしまうのです。

(6) もともと、「測れない」ということは、「ない」と同じではありません。「人間力」と呼ぶしかない力を持っているように  
見える人がいます。 C、不況で多くの企業が新規採用を抑制し、採用試験に落ち続ける人がたくさん出てくるような  
状況で、ひとりだけいくつもの企業から内定をもらっているような人。

私が大学四年生だった二〇〇〇年は、ちょうど「就職氷河期」と言われた頃でした。大学四年の夏休みを過ぎてもリクルート

( スーツを着続ける学生がいる一方で、ゴールデンウィーク前までに有名企業から何社も内定をもらっている人もいました。「採用する側が欲しがると人は、確かにあると実感したものです。そういう人たちは、同じ学生から見ても、「なんであの人が」という感じではなく、「ああ、確かに。この人なら採用したいよなあ」と思わせる説得力を持っていました。だから、「人間力ってやっぱりあるよね、必要だよな」と言いたくなる気持ちは分かります。

(7) つまり、あえて言うならば、不況にもかかわらず採用される可能性の高い人はいるでしょう。けれども、それを個人の「能力」の問題にするのが適切なのか、ということです。多くの人は、景気が良ければ採用されるし、不況になると採用されなくなります。社会が不況かどうかは、その人の「能力」とは直接関係ありません。ある人が面接で落ち続けるのは、「人間力」が低いだけでなく、単に景気低迷のためかもしれないのです。

(8) このように、問題を個人に還元し、自己責任を強調する強い方向性があります。しかし一方で、私たちは「社会に問題がある」ことを、既に十分に知っています。「関係性の個人化」<sup>②</sup>のもう一つの気持ち悪さは、それが社会要因の認識と併存していることです。

二〇〇〇年代半ばには、「ニート」バッシングに見られたように、仕事をしない／できない人びとを「怠け」「甘え」と見なす風潮が顕著でした。それ以降も、基本的にこの傾向は根強くあり続けています。ですが、二〇〇〇年代後半ぐらいから、「ワーキングプア」「ネットカフェ難民」などの言葉に象徴される「貧困」が問題化されるとともに、「個人ではなく社会の問題」という理解も一定の社会的な合意を得るようになってきました。「懸命に働いても生活がなり立たない、意欲を持って探しても仕事がないとすれば、それは社会が悪い」というわけです。

(9) ところが奇妙なことに、「〇〇力」の流行は、こうした社会要因的視点と並行して生じています。「失業や貧困は社会の問題だ」と、「仕事を得るためにコミュニケーション能力を高めよう」は、ある種のリアリティにおいて矛盾しないのです。

(10) たとえば、「いくら問題があっても、「親のせい」「社会のせい」と人のせいにはばかりしてはだめだ。結局は自分が何とかするしかないのだから」という言い方があります。社会的に恵まれない背景を持つ人間が罪を犯したりすると、テレビのワ

イドショーなどではしばしば、ひとしきり社会背景についてあれこれ言った後で、先のようなコメントで締めくくられます。この種の発言は時に、どんな社会要因論者の発言よりも、説得力を持ってしまいます。私たちは少なからず、「社会のせいだ」といったところで、社会はすぐには変わらない。有利に生きるためには自分を変えた方が早い。というより、自分を変えるしかない」という「絶望」を抱えています。

この「絶望」は、「自分の人生とその他大勢の人の人生はぶつりと切り離され、交わりもつながりもしない」という感覚の上に成り立っていますが、その同じ感覚によって「無痛」化され、やり過ぎすべき日常に組み込まれています。この、市場競争のなかではばらばらに切り離された個人、という強固な前提が、個々の生存戦略のなかで、社会要因論のリアリティを奪っています。それはいくら緻密に議論されたとしても、「社会」という抽象的なもの、あるいは自分とぜんぜん関係のない誰かに関することであり、それとは切り離されたところで「自分はどうかやって勝ち残るか」という現実的なサバイバルゲームを続けさせていきます。

(11) 一九八〇年代以降、地球規模で展開していく市場競争と、それを後押しした政策が、不安定雇用を増加させ、多くの人の生活から安定や安心を奪っていったことはまぎれもない現実です。その中で、ただ解雇におびえずに働き、生活に足る賃金を得るという当然の権利が奪われているとすれば、それは個人要因であるはずがありません。

にもかかわらず、「社会」の問題を認知しながらも、結局は「でもやっぱり、そこをどうにかできなかつたのはその人に人間力がなかつたからでしょ」ということになってしまう。<sup>③</sup> なぜこつということが起こるのでしょうか。

(12) ひとつのポイントは、ここで問題となっているのが、明らかに個人を超えた社会要因とわかるものではなく、個人の特性や身体性がある程度介在した「関係性」であるという点です。「関係性」は、「個人」と「社会」のあいだに生じるものであるため、それらのどちらからでも説明することはできますが、どちらの説明でも漏れ落ちるものが出てきます。 D、社会要因論と個人要因論は打ち消しあわず、奇妙なかたちで併存してしまうのではないのでしょうか。

(13) 「コミュニケーション能力」を例に、具体的に考えてみましょう。コミュニケーションとはそもそも「個人」に還元でき

るものではなく、二人以上の当事者のあいだに生じる関係的な事柄です。「コミュニケーション能力」という言い方は、たとえば男女間の意思疎通がうまくいかないとき、「彼／彼女にはコミュニケーション能力がない」と一方的に断じることであり、「関係性」を無理やり個人要因に還元しています。一方で、それは社会要因にも還元できるものではありません。つまり、男女間のダイスコミュニケーションは、「男女という非対称的な差異を生み出す社会構造」からのみ説明できるものではないでしょう。

(14) 私が試みたいのは、そうした「関係性」をめぐる問題について、「個人」にも「社会」にも還元することを可能なかぎり先送りしながら、そのまま「関係性」の水準で捉えてみることです。前記の例でいえば、「彼／彼女とコミュニケーションが取れない」という女性や男性に対して、「コミュニケーション能力を身につけなさい」とか、「ジェンダーを生み出す社会構造を変えましょう」とか言うまえに、「どのような文脈で、誰の、いかなる振る舞いがコミュニケーションの途絶を招いているのか」をその都度問い返していく、ということです。

このように関係性の水準で考えることによって、<sup>④</sup>ある種の「生きづらさ」を抱えている人々のリアリティに迫る可能性が開かれます。

現代の日本社会は、学校や職場において、さまざまな「生きづらさ」を生み出しています。「生きづらさ」は、不登校、ひきこもり、ニート、フリーター、野宿者、障がい者などの枠組で問題化されることもありますが、それらの枠組からは漏れ落ちる曖昧さも含んでいます。

たとえば、精神科に通いながら体調のいい時に短期で働くこと、ひきこもり働くことなく家にいること、いじめ被害の経験から人間不信が強く友人関係や職場関係をつくるのが困難であること、忙しく働いても職場は不安定で給料が安く食べていけないこと、「仕事をしたい／しなければ」と思っているにもかかわらず就業にむけて踏み出せないこと、「仕事をしたい／しなければ」という思いそのものを持ちにくいこと。これらを、本人が何らかの苦しみを覚えているかぎりにおいて、「生きづらさ」と呼ぶことができます。これらはしばしば重なっており、ひとりの人が複数の事態を同時に、あるいは時期をずらして経験することがあります。



このような「生きづらさ」を、もう少し分節化して考えてみましょう。政治哲学者の萱野稔人は、作家の雨宮処凛との対談において、「社会・経済的な生きづらさ」と「精神的な生きづらさ」を分けています。

「社会・経済的な生きづらさ」とは、不安定労働や貧困、格差・不平等といった問題です。

一方で、「精神的な生きづらさ」は、前記に還元されないものを示しています。就労しない／できない人びとのなかには、「仮に正規雇用の仕事が豊富にあったとしても、働く(ことができる)かどうかわからない」という人がいます。ひきこもり者やいじめ被害者、不登校経験者、精神的な不安定さを抱える人などのなかで、「人とのつながり」に困難を感じる人びとにはこうしたケースが少なくありません。彼ら／彼女らの抱える問題は、就労問題というよりも、自己と他者や集団との関係の次元で発生しているところがあります。

**E**、「精神的な生きづらさ」という言葉は、問題を個人のメンタルヘルスに回収してしまうニュアンスがあるので注意が必要です。それは個人の特殊な状態や性質というよりも、人が他者や集団につながる時にある局面で不可避免的に立ち現われてくる関係性の失調のようなもの、ではないでしょうか。疾病、障がい、貧困などの合理的な理由がないにもかかわらず、他者と集団とのつながりに困難を感じる人はいます。これを、「精神的」という個体内完結的な用語に代えて、環境との相互作用の意味を込めて、「関係的な生きづらさ」と呼びたいと思います。

「関係的な生きづらさ」とは、自己責任にも社会要因にも還元されない、個人と他者や集団との「あいだ」に生じる失調です。つまり、「働きたくても仕事がない」(失業)、「どんなに一生懸命働いても生活がまわらない」(ワーキングプア)といった労働市場の問題とはひとまず切り離された、「働くことに踏み出せない」「働き始めてもつらくなって辞めてしまう」という事態です。そのため「甘えている、意志が弱い」としてしばしば自己責任と見なされます。しかし、本人にとっては「ぎりぎりまで頑張ってもどうにもならない」という圧倒的な経験であることが少なくありません。

ここでは、そうした何らかの理由で仕事をしない／できない状態にある人に対して、「コミュニケーション能力がない個人の責任だ」とか、「不況や不安定雇用の増加という社会の責任だ」という言い方をできるだけ先送りして、問題をその人とな

がりを持つ職場との関係性において捉え、「どのような経験が、働くことからの撤退につながったのか」「どのような場であれば、働くことに参入しうるか」と問うていきたいと思います。

(貴戸理恵「コミュニケーション能力がない」と悩むまえに」より。ただし原文の一部を変更してある。)

問一 文中の空欄 **A** ～ **E** に当てはまる語句を、つぎの1～8からそれぞれ一つ選び、その番号を解答欄にマ

ークせよ。ただし、同じものを複数回選択してもよい。

- |   |      |   |      |   |      |   |      |
|---|------|---|------|---|------|---|------|
| 1 | けれども | 2 | なにゆえ | 3 | たとえば | 4 | いかにも |
| 5 | やはり  | 6 | そのため | 7 | なぜなら | 8 | そのうえ |

問二 文中の傍線部①「関係性の個人化」について、著者はそれをどのようなものと捉え、またどのような問題があると考えているのか。つぎの1～5の中から最も適切なものを一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 「〇〇力」という、実際には存在しない能力を「ある」と措定してしまうことであり、本来は社会の問題でもあることを個人の問題に偽装してしまうという問題がある。
- 2 曖昧で測れないものを「能力」と見なすことであり、どうやって身につけるのかが分からないものを追い求めさせてしまうという問題がある。
- 3 文脈依存的にしか見出すことのできないものを「能力」という個人化された言葉で表現することであり、個人の裁量ではどうにもできないかもしれないものを、個人の責任にしてしまうという問題がある。
- 4 ほんらい測ることの難しい個人の人間性や内面性に関わるものに「能力」の仮面をかぶせることであり、英語力などのように測定可能なものに見えてしまうという問題がある。
- 5 「人間力」など、実際に存在すると言わざるを得ないようなものを、あたかも存在しないかのように見せることであり、ほんらいは個人の問題であることをごまかし、責任逃れに活用されてしまうという問題がある。

問三 文中の傍線部②「もう一つの気持ち悪さ」とはどのようなことか。つぎの1～5の中から、最も適切なものを一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 ほんらいは文脈依存的で容易に測定できないようなものを、あたかも測定可能な「能力」であるかのように呼ぶことで、問題を個人に還元し、自己責任を強調する方向性があること。
- 2 仕事をしない／できない人びとを「怠け」「甘え」と見なす風潮が一方で存在しているながら、他方で「個人ではなく社会の問題」という理解もなされるようになり、社会の中に二つの考え方が同時に存在していること。
- 3 失業や貧困、社会的に恵まれない背景などが個人に与えている影響の大きさが、いくら緻密に議論され、提示されたとしても、なかなか社会の中に浸透していかないこと。
- 4 「問題は個人にあるというより社会にある」という考え方をいかに学んだとしても、社会改革への意識が低いために、社会を変えるべきだという主張にはなかなかつながらないということ。
- 5 社会要因論が理解されていないのではなく、社会要因論を人々が十分に理解していながらも、それがすぐに個人のサバイバルゲームに読み替えられてしまうということ。

問四 文中の傍線部③「なぜこういうことが起こるのでしょうか」とあるが、著者はなぜだと考えているのか。つぎの1～5の中から最も適切なもの一つを選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 問題となっているのが、社会のありようだけでなく個人の特性や身体性も介在した関係性であり、個人にも社会にも還元しきれない要素があると同時に、どちらの説明の仕方も常に一定程度は有効だから。
- 2 地球規模で展開していく市場競争と、それを後押しした政策が、不安定雇用を増加させ、多くの人の生活から安定や安心を奪っていったという事実が、いまだに十分に認められていないから。
- 3 社会に原因があるという主張が何度なされても、それとは切り離されたところで「自分はどうやって勝ち残るか」という現実的な生き残りを賭けた闘いが続けられてしまうから。
- 4 市場競争のなかで個人がばらばらに切り離されているために、人々が労働者として連帯し、ともにひとつの社会問題に取り組むための組織的な基盤が失われているから。
- 5 「社会」と言われても、抽象的で、自分とぜんぜん関係のない誰かに関するだけでしかなく、そのものとしてのリアリティに欠けるから。

問五 文中の傍線部④「ある種の「生きづらさ」を抱えている人々」とあるが、こうした表現を用いることで、著者は特にどのような人々に注目しようとしているのか。つぎの1～5の中から最も適切なものを一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 正規雇用の仕事が豊富にあれば十分にやっつけていけるにもかかわらず、現在の社会状況ゆえに、不安定な労働に従事し、貧困から抜け出すことができず、生活を改善できないでいる人々。
- 2 精神的な不安定さを抱えているために、たとえ正規雇用の仕事が豊富にあったとしても、働き続けられるかどうかかわからないような人々。
- 3 ニート、フリーター、野宿者、障がい者などの枠組で捉えられているが、そのなかでも多様な苦しみを抱えている人々。
- 4 学校に通ったり、仕事に就いたりという局面において、さまざまな形で他者や集団と関係性の失調を経験しており、従来の枠組では捉えきれない曖昧さを含む人々。
- 5 学校で他者や集団につながる時に、相手とうまくコミュニケーションを重ねられず、周囲とのほどよい関係を育んでいくことができないため、不登校になった人々。

問六 つぎの一文を入れるとしたら、どの段落の前に入れれば良いか。文中の(1)～(14)の中から、最も適切な段落を一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

少なくとも、「人間力」「コミュニケーション能力」その他多くの「〇〇力」は、すでにそれを持っている人に対して「あの人には、〇〇力がある」というふうには言えても、それがない、低いとされる人に対して「〇〇力を身につける」とは言えないのではないのでしょうか。

問七 つぎの1～7の中から、本文の内容と一致するものを二つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 「〇〇力」という言葉は、行政などの文書ではまだ用いられていないが、一般的には広く実感をもって用いられるようになってきている。
- 2 「能力」をテストのスコアで測ることができると想定することは、「能力」がほんらい他者や場との関係によって変わってくるものであることからすると、誤った考え方である。
- 3 近年では、「ワーキングプア」「ネットカフェ難民」などの言葉に象徴される「貧困」が問題化されることで、仕事がないことや学校でうまくやっけていけないことを、個人の責任ではなく社会の責任だとする理解も一定の社会的な合意を得ている。
- 4 コミュニケーションはほんらい他者や組織との関係にあるものであり、コミュニケーションがうまくいかないとき、その要因が個人にあると考えるのは全くの間違いである。
- 5 現代社会である種の「生きづらさ」を抱えている人々が直面している問題は、本質的にはすべて、不安定労働や貧困、格差・不平等といった、社会的な問題である。
- 6 ある種の人たちは、たとえ正規雇用の仕事で豊富にあつたとしても、働く(ことができる)かどうかかわからないが、それはその人たちが精神的に健康な状態にはないからである。
- 7 個人要因論に対抗するためには、単に社会要因論を打ち出せばいいということではなく、生じている問題や「生きづらさ」を関係性のレベルで問いかえすことが必要である。

〔三〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

国際的という言葉は、この頃はじまった言葉ではない。私が若い頃でも、国際的になるということは一種の理想であつた。外国語をしゃべり、洋服を着、洋館に住んで、西洋人と同じような暮らしをする。現代ではその理想がおおかた達せられたように見えるが、<sup>(1)</sup>中身はイゼンとして昔ながらの日本人であり、やたらに横文字がふえただけで、一步も前進したようには思われない。むしろ退歩したかのように感じるのは、それまで大切にしていた日本の文化を惜しげもなく捨ててしまったからで、鹿鳴館の亡霊はいまだに巷をさまよっているように見えなくもない。

国際的という言葉には、どうもはじめから誤解があつたらしい。英語のインターナショナルの訳であるが、それは国際会議とか競技とか放送とか、お互いの国柄同志の付合いを示す語で、国際空港というのはさし支えないが、国際的な「国」とか「文化」というのはおかしい。似たような言葉にコスモポリタンというのもあるが、よくいえば世界主義者、悪く言えば根無し草で、それとこれとは違つのである。

一つの国には、それを造りあげてきた長い歴史と文化があり、<sup>(2)</sup>一朝一夕で変わるものではなく、また変えられるものでもない。そのくらいことは自明のことだつたと思うが、<sup>(1)</sup>絢爛豪華な外国文明に眩惑された明治政府の役人は、いとも簡単に外国のものはいい、日本のものはダメだ、<sup>(2)</sup>とタンラクの的にきめてしまい、ことに学校教育の面では全部が全部西欧風になり、今でもそれはつづいている。ある一面でそれは正しくないこともなかつたが、<sup>(3)</sup>抽象的な科学や技術は別として、<sup>(3)</sup>ジヨウソウ教育に関しては<sup>(1)</sup>取り返しのつかぬものが山ほどある。

たとえば小学一年生にオタマジャクシは読めても、日本の芸術一般が大切にしている「間」というものの微妙なニュアンスはつかめない。間をとるなんてことは易しいことなので、一年生にでもできるが、私がいたいのはそんな機械的なことではない。間という曰く言いがたい空白の時間の中に、言葉では表現しにくい多くのことがかくされているからだ。

月やあらぬ春や昔の春ならぬ わが身ひとつはもとの身にして

② 在原業平が、梅が咲いている頃に、一条の后と恋を語ったその思い出を歌ったものである。そんなにもいい歌ではなく、何となくわかったようなわからぬようなところがあるが、それでも私は大変好きなのである。

「月やあらぬ」でひと息つき、「春や昔の」と、ためらいがちに「春ならぬ」といつてしまった後は、ため息を吐くように「わが身ひとつはもとの身にして」というところへおさまる。

月も春の花もすべて去年とは変わってしまったのに、業平だけが変わらずにここにいる。おぼろ月夜のさだかならぬ光の中で、彼の心はその孤独な寂しさを浮き立たせているかのようで、やがてその姿も暁の霧の中にとけこんで消え消えとなって行く。

折口信夫は、日本の歌の美しさをそういう A に見た。たとえば氷をにぎっていると、指の間からみるみるとけてなくなってしまう。後に何も残さないそのセイシンでさわやかな感じにたとえたが、それは音楽にしても舞踊にしても同じことなのだ。別の言葉でいえば、歌を詠んでいる、または舞を舞っている、その間が生きていることなのであって、済めば消えてしまつていいのである。

そういう気持ちでもう一度「月やあらぬ春や昔の……」とくり返してみたい。言葉としてそれは殆ど意味をなさないかも知れないが、そのリズムのかもしれない。

業平が生まれた平安初期は、中国一辺倒の時代で、何事も中国の模倣をしなければ夜も日も明けぬ有様であった。万葉集は忘れられ、公文書は元より、ふつうの交際でも漢詩を作らなければ一人前には扱われなかった。

やまと歌は生活の片隅に押しやられ、わずかに私的な恋歌の中で細々と生命を保っていたにすぎない。そういう歌しか残さなかった業平は、頭から「才学なし」と馬鹿にされていたが、はたしてそれはほんとのことだったであろうか。あれほど情緒纏綿たる歌に打ちこんでいた歌人は、いかに出世のさまたげになろうとも、漢詩世界では自分の心のだけを言いつくすことは



できなかったに違いない。

現代の日本は、平安初期の風潮に大変よく似ていると私は思っている。外部の嵐にもまれることは一概に悪いとはいえない。私みたいに年をとっていくらか世の中の経験を積むと、何がいいか悪いとか簡単にはいえなくなるもので、いいと思つてゐることが悪くなつたり、その反対の場合もある。わり切れるものなんかこの世界には一つもなく、すべてはフアジーなのだ。そう思つてしまえば気楽なものだが、そこで手綱をゆるめすぎると、フアジーに足をとられて転ぶことになる。あくまでも心の手綱はしっかりと握つていて、さてその上で運を天に任せていれば何とか安穩に過ごせるといふものか。

(白洲正子「名人は危うきに遊ぶ」より。ただし原文の一部を変更してある。)

問一 傍線部(1)～(4)の語のカタカナの部分にふさわしい漢字をつぎの各群の1～10の中からそれぞれ二文字選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- |     |       |   |   |   |   |   |   |   |   |    |   |
|-----|-------|---|---|---|---|---|---|---|---|----|---|
| (1) | イセン   | 1 | 意 | 2 | 衣 | 3 | 威 | 4 | 依 | 5  | 以 |
|     |       | 6 | 漸 | 7 | 前 | 8 | 然 | 9 | 繕 | 10 | 善 |
| (2) | タンラク  | 1 | 端 | 2 | 短 | 3 | 淡 | 4 | 反 | 5  | 耽 |
|     |       | 6 | 楽 | 7 | 洛 | 8 | 烙 | 9 | 絡 | 10 | 落 |
| (3) | ジヨウソウ | 1 | 条 | 2 | 状 | 3 | 情 | 4 | 穰 | 5  | 常 |
|     |       | 6 | 総 | 7 | 想 | 8 | 燥 | 9 | 綜 | 10 | 操 |
| (4) | セイシン  | 1 | 静 | 2 | 精 | 3 | 清 | 4 | 聖 | 5  | 生 |
|     |       | 6 | 真 | 7 | 新 | 8 | 心 | 9 | 芯 | 10 | 神 |

問一 傍線部(ア)～(ウ)の語句の意味として、もつとも適切なものをつぎの1～5の中からそれぞれ一つ選び、その番号を解

答欄にマークせよ。

- (ア) 一朝一夕 1 単純で簡単な様子 2 思い切りよく大胆な様子 3 わずかな期間  
4 迷いのない様子 5 なまかじりの知識

- (イ) 眩惑 1 大勢に流されること  
2 人の目先をまどわして騙すこと  
3 目がくらんで正しい判断ができなくなること  
4 表面的な意見にまどわされること  
5 変化するものに翻弄されること

- (ウ) 纏綿 1 切れ目なく迷い悩むさま 2 心にまとわりついて離れないさま  
3 わり切れない思いに葛藤するさま 4 心が高ぶり抑えられないさま  
5 嘆き悲しむさま

問二 本文中の傍線部②「在原業平」は六歌仙の一人と言われているが、つぎの1～5の中で六歌仙に含まれない人物を一人選

び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 紀貫之 2 小野小町 3 大伴黒主 4 僧正遍昭 5 喜撰法師

問四 つぎの1～5の中で、在原業平の歌ではないものを一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 世の中に たえて櫻のなかりせば 春の心はのどけからまし
- 2 ちはやぶる 神代もきかず 龍田川 からくれなゐに水くくるとは
- 3 名にしおはば いざ言問はむ都鳥 わが思ふ人はありやなしやと
- 4 花の色は 移りにけりないたづらに 我が身世にふるながめせし間に
- 5 狩りくらし たなばたつめに宿からむ 天の河原にわれは来にけり

問五 本文中の空欄 A に入る最も適切なものを、つぎの1～5の中から一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 さびしさ
- 2 奥ゆかしさ
- 3 哀しさ
- 4 はかなさ
- 5 曖昧さ

問六 本文中の傍線部①「取り返しのつかぬもの」とあるが、どのようなものを失ったと著者は考えているか。つぎの1～5の中から最も適切なものを一つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 日本文学の知識
- 2 日本の和歌を詠みとる力
- 3 日本の和歌に表現されるリズムを尊ぶ伝統
- 4 「間」をとることで、言葉の意味をあえて曖昧にする姿勢
- 5 「間」の中に、言葉で表現されにくいニュアンスをくみ取る力

問七 つぎの1～6の中から、本文の内容と一致するものを二つ選び、その番号を解答欄にマークせよ。

- 1 国際的になるということは、外国語をしゃべり、洋服を着、洋館に住むというような、外見的に西洋人と同じような生活をするのではなく、西洋の文化を取り入れていくことである。
- 2 国際的になって、日本はある部分進歩したように見受けられるが、日本の文化・伝統という点では失ったものは大きい。
- 3 一つの国にはそれを作り上げてきた長い歴史と文化があるが、日本の場合は中国や西欧の文化を取り入れることによって自国の文化を作り上げてきた。
- 4 日本の芸術一般が大切にしている「間」というものは、表現しがたい空白の時間の中にかくされているものであり、無常さゆえの美しさがある。
- 5 在原業平は、中国一辺倒の時代の中で、「間」を表現しようとしたために、「才学なし」と馬鹿にされ、自分の心を表現出来なかった。
- 6 何がいいとか悪いとか、わり切れるものはこの世界には一つもないだけに、全てフアジーであるにとらえて、運を天に任せていくことが安穩に過ごす術である。